

**西村幸夫**(工学系研究科・)  
「地名の研究」柳田國男(「柳田國男全集

8」所収、筑摩書房、一九九八)

柳田民俗学の一端に触ることによって、日本とは何か、日本の文化とは何か、日本人はどのように暮らししてきたかについて、膨大な情報をもとに掘り下げる思惟するということはどういうことかを知ることができる。その代表としての一編なので、この本に限定した推薦ではない。ひろく柳田國男のひらいてくれた世界を垣間見て欲しい。

けでありがたいという気持ちになる。



『集落の教え100』原広司(彰国社、一九九八)

東大教授でもあった建築家が二五年にわたる海外集落調査の成果を一〇〇のエッセンスとして簡潔にまとめた書。数多い写真とアーチビズムとも短詩とも呼べる詩情あふれる美しい短文とで綴つたもの。土着的な集落が周到にデザインされたものであること、その様相から学ぶべき点が数多いことの発見は、私たちの集落を見る目を鍛えてくれる。

「東京都市計画物語」越澤明(ちくま学芸文庫、一〇〇一)

日本には(したがつて東京にも)都市計画は不在だったとよく言われるが、この書を読むと、たしかに東京にも都市計画はあつたということがよくわかる。ただし、それは挫折したのである。

与えていくという、気の遠くなる営みの産物なのだ。

③、「繁華街の近代——都市・東京の消費空間」初田亭(一〇〇四)

永年、都市空間としての繁華街研究をおこなってきた著者が銀座煉瓦街や土蔵づくりの商店街からアールデコの店舗建築まで、百貨店や喫茶店の出現を東京を舞台に、豊富な写真や図面を用いて描いている。こうしたことを知つて盛り場のまち歩きをするとなると、まちのおもしろさも倍増するだろう。

④、「都市保全計画——歴史・文化・自然を活かしたまちづくり」(東京大学出版会、一〇〇四)

一〇〇〇頁を超える本なので気が引けるが、都市保全計画の歴史から技法、実践例、海外事例まで全般にわたつて書かれたわが国初の本で

今では入手しづらくなっているようだが、私が駒場へ入学した当時生協の書籍部で見かけ、定価七五〇円から一二〇〇円と高価だったにもかかわらず即座に購入した本。文章はもちろん、図表からスケッチ、箱のデザインまで自ら手がけた、丹精込められた三巻。日本のすまいの全貌をひとつ的思想をもつて描ききろうとした力作である。

『回思九十年』白川静(平凡社、一〇〇〇)

金石文・文字学の泰斗の学問人生を振り返った書。白川静が著したほかのどの本を読んでもその実証研究の奥深さに心を打たれるが、本書では学問一筋に生きるということはこういうことをいうのだということを身を以て示してくれている。こうした巨人と同時代に生きているだ

る。もう一つ、よく見るごく普通の本にそそぐ痕跡を見出すことができる。東京育ちのひとも、東京暮らしを始めたばかりのひとも、本書を読むことによって、東京の見方が格段に深まるだろう。

『日本近現代都市計画の展開1868-2003』石田頬房(自治体研究社、一〇〇四)

初めて本格的にまとめられた日本の都市計画の通史。出版されて間もないが、今後、都市計画を学ぶ者の必読の教科書となるだろう。私自身後述するようにまがりなりに通史をまとめたことがあるので、その苦労が並大抵でないことはよくわかる。つい最近まで受験生であった新入生諸君にとっては、教科書とはたんに暗記の対象だったかもしれないが、類書のない中で通史を編むということは、史実を博搜し、それを確固とした視点でふるいにかけ、位置づけをを附している。